

# Interview



ノイバラの実からとれた小さな種



出荷を待つ苗がズラリ



篠宮バラ園のフェンスを彩るバラ

## バラ一筋40年 父から息子へ受け継ぐバラ生産農家

篠宮バラ園 篠宮政樹さん・俊介さん

温室にて  
篠宮政樹さん(右)と俊介さん



今年も心ときめくバラの季節が巡ってくる。東久留米市南沢にある篠宮バラ園は都内で唯一といい、バラ専門の生産農家。地元での販売はもとより、ネット販売によって全国から注文がくる。取り扱うバラの種類もオールドローズ、つるバラ、モダンローズなど5百種以上。年間2万~3万鉢を出荷している。永年にわたるバラ作り一筋の卓越した技術が、健康で良質な苗を生み出している。

バラは裏切らない…

この道40年

バラは連作を嫌う植物で、1年おきに土をつくらなければならない。そのため、生産には広い土地が必要。篠宮バラ園は借地も含め約3300坪に温室と圃場がある。温室には出荷を待つ新苗や大苗の鉢がズラリ。11月から予約が入っているので、その鉢には目印の支柱が立っている。

篠宮政樹さん(62歳)は3年前から経営面は次男の俊介さん(32歳)に任せ、生産に専念している。俊介さんはバラとは関係のない会社で10年間サラリーマンを経験し、自ら「後継者になりたい」と父に申し出た。それはやはり「バラが好きだったから」だという。周りに常にバラがある環境で、働く父の姿を見て育った俊介さんにとっては当然のことだったのかもしれない。父の政樹さんは「バラは裏切らない。やればやっただけのことをしてくれる。育て甲斐のある花です」と話す。

政樹さんは農家の次男坊、19歳の時から3年間、川口にあるバラ園に修業のため、住み込みで働いた。家事全般からバラの基礎知識など何でも勉強だった。24歳でそのバラ園の娘さんと結婚。技術を受け継ぎ、独立してがむしゃらに働いた。2人の男の子を授かり、保育園へ送迎しながら、日中は奥さんとともに作業し、夜は世田谷や荻窪の市場へバラを運んだ。

「当時はインターネットなんてないから売り方がわからず、市場しかない。市場の場所取りをして、少しでも高く売るため、売り頃の花が映えるよう自分で並べたもんです」

高度成長時代は何かをやれば儲かった頃。大変だったけれど、若さと夢があった。それも奥さんが支えてくれたからこそ、奥さんには感謝の念がいっぱいという篠宮さん。

すべてのバラは台木から

バラは原種とされるノイバラを台木にして、さまざまな品種をそれに芽接ぎして栽培する。秋にノイバラの赤い実がなり、その中には6~10粒ほどの白ごまのような種が入っている。それを2月頃まで、温度、湿度管理をして熟成させ、選別して3月に播種する。タテ2メートル近くはありそうな箱に入った、播く直前の、夥しい量の種を「これは当園の宝です」と見せてくださった。すべてのバラ生産の元となっているのが、このごま粒のような種たち。美しいバラもこの1粒から…と思うと、何だか感動する。日本の気候風土に適したノイバラの台木が、丈夫な耐病性ある苗を育ててくれるのだ。

土づくり、台木の管理育成、最も生長が早い技術での芽接ぎ、掘りあげ、ポット植え、温室での管理、出荷作業とバラ園の1年は忙しい。そして4月

「6月は出荷の繁忙期だ。それはまた「育てた成果がでる楽しみな時期」だと俊介さん。プロの目による選りすぐりの苗が全国に旅立っていく。今の人気は「イングリッシュローズ」。オールドローズの繊細な魅力と芳香。それに加えて、モダンローズの多彩な色と四季咲き性を持たせたすばらしい品種だという。

## 住宅の庭に

### バラ園をつくりたい

「バラを植えたいけれど、育てるのが難しいのでは」という人も多い。そんな方へ篠宮さんからアドバイス。「何より大切なことはしっかりした

苗を手に入れること。ひ弱な株によい花はつかない。健康な株が見事な花を咲かせます。熱心な余り、水や肥料、消毒などやり過ぎる人が多いのでは。生長を手助けする感じで、必要最小限のことでもいいんです。そしてうどんこ病や黒点病をいかにおさえていくか、気をつければ、初心者でも難しくないので。ハウツー本を読んで悩むより、ぜひ生産者に訊ねてください。私どもも売ることでだけではなく、お客さんのご相談に乗り、永年の経験から何でも応えていきたい。バラを通じたおつきあいが楽しみなんですよ」

「自宅庭にバラ園をつくってほしい」

という依頼もくる。設計し、植え付けし、手入れして年間を通して管理するとともに、家の人に育て方を教える。生長の早いバラは庭を美しく変身させていく。お客さんの喜びの声がイコール篠宮さんの喜びだ。これから最もやりたいことは、この個人宅のバラの庭づくり。「通り道に何も植えていないフェンスを見ると、つるバラを這わせてあげたくなる（笑）」

もうすぐ篠宮バラ園のフェンスも、温室前の中庭もバラの花々に満ちる。1年中で最も華やき、お客で賑わう時期だ。土地の問題、市街地での農作業の難しさなど都市農業の限界を思い、

他県への農地開拓も視野に入れざるをえない状況もある。父と息子の世代間ギャップで意見が衝突することもあるけれど、共通するのは「バラ生産はやりがいある、すばらしい仕事だ」ということ。これからも父から息子へ、バラを愛する心と生産技術が伝えられ、篠宮バラ園から生まれたバラが通りや庭を彩っていくだろう。

東久留米市南沢4-1-17

☎042(459) 1155

営業期間は6月末まで、4月～

5月末は無休 9時～17時

HP「篠宮バラ園」で検索